

未だ野

すぐろの

10月号 (通巻842号)



冷奴

小川 玉泉

(名譽主宰)

下枝より咲き初め雨の百日紅
全天の茜をまとひ梅雨烏
真つ向に富士や西日の坂下る
鐘響き西日の染むる花頭窓
ひとり身や何はさておき冷奴
子別れの烏か騒ぐ屋根の上

ひとり身や何はさておき冷奴

今年ぐらい、暑い梅雨から夏の終わりはなかった。全国をすっぽり包んだ三十五度を超える蒸し暑さには、抗し切れない毎日であった。そのような暑さの中の食事は、勢い水分の多いものとなる。常用の豆腐は木綿の大山豆腐である。江戸後期の蘭学者杉田玄白も常用したと物の本にあった。

梅雨

わが胸の高さを出でず梅雨の蝶
梅雨の蝶森の昏さを引きずらず
歯を抜かれ綿噛みしめぬ西日中
薔薇園は眠り軍港眠らざる

松本三千夫

軍艦を眠らせ梅雨の月円か
パンの耳四角く残す溽暑かな
月涼し職員室のまだ灯り
黒南風やイージス艦を目交に
では行くかと呟いて立つ大暑かな
鉢に咲き浄土の白の蓮かな
沢瀉や葉は日を射んと斜に構へ
河童忌や日暮怪しき空模様

鵜飼

黒滝志麻子

(副主宰)

水馬に加はる雨の水沫かな
わが歩幅まだ確かなり雲の峰
菖蒲田の空や水音晴れ晴れと
風鈴やなまけ心の昼下り
川風のよどむ暗さや蚊食鳥
たちまちに漁船をかくす騒雨かな
鵜飼果て水の香に身を浸しをり
津軽三味聞きゐる広間夏炉焚く
燃ゆるもの未だ溜めてをり百日紅
駅前には花屋開店パリー祭
野生馬の草食む傾り大西日
明るきに雨の降りをり青胡桃

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

山法師

森清堯

堂に入る白装束や今朝の夏
山巔の雲の動かさず大代田
老鶯や二千年経し箒杉
遠回しのことばにごくりソーダ水
光堂へ降りみ降らずみ時鳥
宿坊へわたる朱の橋山法師
朱の橋をしきりに掠め夏燕
鬼蜘蛛の引き始む糸や朝の日矢
鉢のまま芝に埋められ苑の百合
夏霧のすつぽり覆ひ山上湖

梅雨夕焼

森清信子

海鼠壁続く川岸夏つばめ
城址を騒めかす風青葉冷
夏蝶や日の斑の揺るる能舞台
忽然と闇滑り出づ恋蚩
木道に雨粒弾け半夏生草
婚姻色まだ残る鮠梅雨晴間
指切りの小指短し梅雨夕焼
林泉の緑蔭に時忘れけり
枯山水の滝は大石揚羽蝶
山裾へ夏霧迅し白樺



病 床

安 齊 久 英

吹けばとぶ十貫の身や梅雨に臥す
短夜や長し長しと朝鴉
入院の梅雨籠りとはなりにけり
点滴の遅々と軒打つ若葉雨
病床も病衣にも馴れ梅雨明くか
海霧の沖望むオープンカフェテラス
麦秋やサイロの影に眠る牛
小満の月夕星と照り合へる
噴水や真青なる空真つ二つ
ありなしの音の水車や菖蒲園

汗 の 腕

石 黒 興 平

梅雨晴や松籟絶えぬ台場跡
鱸綱の太きを解けり汗の腕
夏潮にとつぷりつかり土運船
奥山の湖の色とも花あふち
旧道は曲がりの多しえごの花
立読みの古書肆出づれば梅雨の街
来し方をふと呼び戻す蚩かな
落ちてなほ奔放失せぬ凌霄花
明易や豆腐屋すでに一仕事
幼児の窓のある傘梅雨深し

夕虹

田中臥石

梅雨しとど千葉市を走るモノレール
駅行のバス停りをり青田辻
惜命の余白や薔薇を溢れしめ
一羽飛び二羽飛ぶ廂燕の子
海ひびく夕暮の畦稲の花
夕虹や駅より海へ路線バス
花の茎出づる蓮田の横たはる廂
雷鳴の一つころがる海に出よ
白鷺のほろほろ飛びぬ穂は穂に
行合の涼しき雲やカンナ果つ



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



蓮見会

菅野日出子

兄眠る壕知らざりき沖繩忌
若竹を花器に路傍の地藏堂
花殻を摘む園丁や菖蒲苑
緑蔭や隠れ家めける小料理屋
昨夜の雨の光る水玉蓮見会
潮風のレトロの駅や燕の子
久々の刺身包丁初鯉

加茂茄子

齊藤マキ子

加茂茄子や木曾の檜の落し蓋
万緑を飛び出すジエットコースター
黴の書の九十銭といふ定価
羅に羽織るうすもの雨しきり
紐をひき灯す生家の夏座敷
民宿の生簀に太る鰻かな
梅雨晴や孔雀の羽根の大目玉

夕螢

堺昌子

声のぼる空の広さや神輿渡御
小さくも蛸やどよめく四人の子
甲高き子等の声とぶ螢とぶ
幾度も星近づけて夕螢
七夕や子の折る鶴の飛ぶかまへ
熊よけの鈴つけ山へ夕立雲
紫陽花や妣との手まりつきの唄

青炎集

松本三千夫選



横浜 小山ほ子

琴の音に風抜けてゆく夏座敷

蜻蛉生る小草にしかと上がりをり

鮎はねて瀬波を越ゆる光かな

明けの宿一声過ぐるほととぎす

万緑に埋もる古刹や朝の鐘

名刹の歴史思はず苔の花

横浜 原和三

千木光る梅雨の晴れ間や婚の列

ちぎれ行く雲の早さや梅雨晴間

法堂の燭のかけろひ梅雨の昼

青田風寄する牧舎や牛の声

黒幄やはたる袋のうす明かり

学僧の青きつむりや梅雨の蝶

横浜 小倉純

玉砂利の沓音すがし夏祓

落つる実梅日毎に増ゆる里の道

芳香や月下美人の咲き初むる

初蟬の薄暮をしきり谷戸の奥

啼きつ翔ぶ小雨の中の時鳥

バイエルのつまづきがちや庭のぼら

横浜 山口登

手作りの句集を編むや麦の秋

鮎の骨丁寧にぬく白き指

小上りに過ぐるを念ず梅雨の雷

背を伸ばすアガパンサスや草茂る

初蟬や一節の声定まらず

立ち話の夢中に消ゆる蝸牛

横浜 戸田澄子

炉煙舎を恋ふか釜利谷蛩舞ふ

お父さんビールですよと夫の墓
地の揺らぎ命ゆらげる溽暑かな
町溽暑笑顔絶やさぬ配達夫
蟬の穴のぞけば里の恋しくて
梅雨月の老犬三十キロ洗ひ

横浜 橋場美篤

ほうたるに賑はひてをり京ヶ坂

河骨の花や明るきにごり池
夏空へテニスボールの音弾け
海亀の産卵肅と星の影
がうがうと人声を消し大瀑布
木洩れ日の屋久島の径苔の花

横浜 小嶋紘一

若楓檜皮の屋根を風渡り

子の騒ぐ濡れ縁下の大き蜘蛛
直会の神酒に揺れをり花擬宝珠
小さき実のみえかくれして花柘榴
合歓散りて雨の舗道を染めにけり
せまりくる空の青さや椽の花

横浜 神谷さうび

雲の峰園の高きに塔聳ゆ
風鐸の鳴れる幻聴青嵐
佇みて屈みて愛づる未草
立錐の余地なき水面根無草
夏柳盛り上がりをり枝垂れをり
夏戸焚く厩に馬の作りもの

横浜 伊藤由良

蚊遣香頸より下ぐる庭師かな
凌霄の花咲きのぼる勢ひかな
先触れの雨いかづちを連れ去りぬ
初蟬の一声のみの余韻かな
曾孫誕生一瞬梅雨も晴るるかに
小さき波立てて甘酒すすりけり

横浜 細島孝子

晩翠の碑濡らす若葉雨
硝子越椿山荘の作り滝
夏服やをんなは試着くり返す
夏ともし五指忙しく句を拾ふ
蓮池の紅より白の燃え立てり
短夜を破る叫びの救急車

耕 土 集

黒滝志麻子選

夏蒲団たよりなきかな夢も見ず
浜風に運ぶ白波夕薄暑

谷島 弘康

濃く淡く咲いて重たき額の花
無口なる男二人の暑氣払
状差しに覗く美人絵古団扇

釣果なき人とめぐりぬ花菖蒲

佐藤 康子

涼風や湖に映え万国旗

かたまりて咲きぬ木蔭の十字花
蜘蛛の囲を繕ふ糸のきらきらと
紫陽花の鞠のとりまきカフエテラス

梅雨寒やこだはりと書くラーメン屋

加藤 タミ

句会場へ杖を頼りの夏帽子
七輪をあふぐ音する洪団扇
フリル付け最新浴衣集ひ来る
父息子墓石をみがく炎犬下

夕立が洗つて行けり野菜畑

重田 修

見合ひ膳の蒔絵づくしや竹の秋

晩涼や草の根を行く水の音

鮎鮮や彦根の城はぬきん出て
タクシーを降りて山路を道をしへ

平塚 尾崎千代一

捕虫網一振りごとの野風かな
玫瑰や釣り船沖に停まりたる
染付の皿や尽くせる夏料理
茅屋の瀬音幽かや蟬時雨
夏雲や異人数多の大鳥居

三郷 中谷 未知

雲間縫ひ漂ふ如き梅雨の月
ピリピリと若さの溢れ新生姜
雲海の夜明け絵巻を繰る如し
万緑の富良野彩る花の帯
北国の新樹湧きたつ山の風

横浜 中村 弘

青涼し雨に洗はる栗の毬
恐恐と撮みし蟹子を針に掛く
鮎一閃力しぼりて堰越ゆる
鵜飼果て川面閑かに夜は更けり
磯の空へ捕へし章魚の絡む手を